

阪神大震災と

大江健三郎講演 「癒される者」

中村 弓子

いま私は地下鉄サリン事件の主謀者たちに対して二重の意味で憤りを感じている。

もちろんまず第一には、この事件がもたらした直接的被害ゆえであるが、第二には、この事件が、それに先立った阪神大震災が私たち日本人にもたらした「良きもの」から注意をそらし相殺しようとしているからである。

大震災がもたらした「良きもの」というと一見バ

ラドクシカルだが、大震災は確かに二つの大きな「良きもの」をもたらした。

第一の「良きもの」、それは日本の戦後五十年に対する反省である。日本が経済大国への邁進のうちでないがしろにしたものが、ちょうど戦後五十年目に起こった震災で露呈されて、そうした諸要素——市民の為の行政の不在、企業中心の都市計画（例えば神戸の市立病院は住宅地域から遠いポートピアに

移転されていて役に立たなかった)、物質至上主義の生活様式、など——に対する根本的反省の機会となった。

第二の「良きもの」、それは震災の大きな不幸を目の当たりにして日本人全体から溢れ出た、他者に対する優しさである。特に、一般的には他人に対して我関せずのエゴイストと思われていた若者たちのボランティア活動は思いがけない発見であった。

——私自身、教師として学年末の任務に忙殺されて身動きできないことを歯がゆく思いながら、自分の大学と非常勤の大学のクラスで、ボランティアの窓口のリストを配り、自分の学生時代のささやかなボランティア活動の経験に照らしても貴重な体験になると思うから是非参加を勧めると言ったとき、非常勤のクラスでは思いがけず拍手が起った。柄にもないことを言う教師を冷やかしているのかと顔を上げて見ると、皆じつにいい顔をしている。私は思いがけない贈り物を貰ったような気持ちになった。そ

のうち何人がボランティアに行ったかはわからないが、ボランティアの若者たちは皆ああいう顔をしていたのだろうと思う。

ところで、大江健三郎の講演「癒される者」(岩波新書「あまいな日本の私」所収)には、現代の、それも特に戦後五十年の日本人にとっての「病いと癒し」の問題が、政治的、内面的次元から総合的に実に見事に考察されている。

「日本、あるいは日本人が病んだ、病気をした、それをもっとも大きいスケールで見るとすれば、それはこの二十世紀において、どういう病気だったでしょうか? 私は、それが太平洋戦争にいたる日本の近代化においての帝国主義の膨張だったと思います。この日本と日本人が病んだいちばん大きい病気によって、アジア全域にわたって大きい死者が出たのみならず、国内でも広島と長崎で、一挙に死にあらはは傷ついた数十万の人間をはじめとして、数知れぬ犠牲者が出た。そのようにして日本・日本人の、

近代化の課程で担い込んだ大きい病気が顕在化したのでした。

そしていままも、病む者、病気をする者としての日本人を大きいメタファーで把えなおすことをめざすならば、広島、長崎の原爆被害を顧みるということには有効だと思います。そこには癒される者、病気を治されて二十一世紀へ向かう者、そういう存在としての日本・日本人を考えるための手がかりもまた含まれていると私は考えています。」(同書20―21ページ)

現代日本の政治的、内面的な「病い」に注目し、それを二十一世紀に向けて癒していかなければならない、という大江氏の提示する問題意識に対して、阪神大震災という思いがけない機会は、「戦後五十年に対する反省」という「病いの自覚」と、「優しさの溢出」という「癒し」の形で、ひとつの対応をひき出した、と私は思う。

阪神大震災は日本のど真ん中を引き裂いた傷で

あった。その傷は今まで隠れていた膿を露わにした。しかし同時に、その傷を日本人全体が自らの傷として引き受け癒そうとした。そこに、この震災がひとつの「幸いな災い」となったゆえんがあると思う。

七百二十余の作品を取めた『悲傷と鎮魂——阪神大震災を詠む』(朝日新聞社)の中には田谷鋭氏の「神のごと青年のボランティアありて僅か救はる震禍ののちを」の歌がある。こうして震災は傷であると同時に癒しとなった。

小田実の『殺すな』と『共生』——大震災とともに考える』(岩波ジュニア新書)の近刊も予告されている。かつてベトナム戦争の時期に「ベ平連」の活動を通して日本の社会への平和のメッセージを送っていた小田氏が、大震災の機会に日本の社会にどのようなメッセージを送ってくれるのか期待される。

最後に、サリン事件で友人を失ったある方が私に

下さった手紙の中で引用されていた聖アウグスチヌスの言葉をご紹介します。それは単純な言葉のうちに、まさに今私たちが必要としているものを言い表

わしていると思われるから。
「愛の空間をひろげる」(Dilatatur spatium
charitatis) (お茶の水女子大学)

『ナルニア国ものがたり』全七巻

C・S・ルイス作 岩波少年文庫

森上 史朗

最近、人間の発達に果たすイメージションの役割が注目されてきています。認知心理学者ハワード・ガードナーによると、子どもの中に既成の約束ごとや形式にそって、ものごとを考えるのが得意な“パタナー”と、イメージションの働きがさかんで、自分自身の独自の考えを構成しようとする傾向

の強い“ドラマティスト”とがあるといえます。そして、今の学校教育や幼児教育はドラマティストを切り捨てて、パタナーをよりパタナーにしていく傾向が強いと批判しています。いわゆる“早期教育”といわれるものなどは、“パタナー”教育の典型ともいえるでしょう。